# 港南中だより

令和６年度（２０２４年度）第１０号（２月）
港区立港南中学校：発行

校長　佐々木 希久子

**学校図書館に行ってみませんか**

「読書は楽しい!」

そんな風に思ってくれている港南中生はどのくらいいるでしょうか。

学校に登校してきた生徒の１日は朝読書で始まります。これも港南中の伝統の一つと言えると思っています。日本で朝読書を最初に行った学校は、朝読書を行うことで学校全体が落ち着いたとのことです。以来、日本中の小・中・高校で朝読書の習慣が広まりました。そうした生活指導的な意味合いもあって行っている学校が今でもたくさんあります。わたしはそういう意味も大切だとは思っていますが、何より、中学生が本に触れる大切な時間の確保だと思っています。

世界中の先人たちの多くは本を読み、本によって多くを学び、本によって夢を膨らませ、本から多くの楽しみを得てきました。一体、読書にはどのような意味があるのでしょうか。経験がある人もいるでしょうが、一冊の本が人生を変えてしまうことがあります。本の中では、旅をしたり恋をしたり、冒険をしたりと様々な擬似体験ができます。登場人物と自分の生き方や考え方を比べて、共感したり反発したりします。また、本を使って、疑問に思ったことを解決するために調べることもできます。本を読んで新しいことを知ることもできます。そんなとき、人は驚きを感じたり、ワクワクしたりするものでしょう。本は、読んだ人の知識を広げ、深い思索を誘い、心の体験として、一人一人の人生に潤いを与えていくものなのです。

全国学校図書館協議会で毎年行っている学校読書調査というものがあります。これによると、2024 年の中学生の一か月の平均読書冊数は、4.1冊でした。これは、過去10年の中で下から3番の結果です。また、一か月間に一冊も本を読まなかった、いわゆる「不読者」は 23.4パーセントとなり、こちらは過去10年間で最高です。平均読書冊数が減っていることも考えると、中学生の本離れが本格化しているということになります。現代は、自分のほしい情報はすぐ検索することができます。また、AIがその人の好みを予想して、スマートフォンなどに登場するCMや検索結果なども一定の傾向をもった情報が上位に挙がってきます。ほしくない情報や全く知らない情報とは触れ合わないのが現代の特徴だと思います。書店に行って、並んでいる本を気の向くまま手に取ってみる。或いは、お目当ての本の隣にあった本にどこか目を引かれて立ち読みしてしまう。そうして出会った本が自分にとって素敵な一冊になる。そんな当たり前の経験は、確かにここ数年で極端に薄れてしまっているようです。街なかにあった書店がいつのまにか姿を消しているというのがこのことの象徴のようです。学校帰りやお出かけ帰りに何気なく本屋さんに寄って、用もなく平積みの本を手にとり、意味もなく書棚を眺め、お目当てや用件からちょっとずれた遠回り、回り道、、、そんなのが本との出会いの大半だったなと、昔を少し懐かしく思い出します。

けれども嘆く必要はありません。中学生には学校図書館があります。本に触れることは、あと少し手を延ばすことで可能になるのです。港南中生の皆さん、ぜひ、学校図書館に行ってみましょう。そして、いろいろな本を手にとっていただいて、自分にとって素敵な本と出会ってください。

この度、PTAからも港南中生のために、学校図書館で読める下の5タイトルの雑誌をご寄贈いただくこととなりました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございます。

・「月間バレーボール」　・「サッカーダイジェスト」　・「野球小僧」（これのみ隔月）
・「ソフトテニスマガジン」　・「MUSICA（音楽）」

これらの雑誌は、１年間毎号ご寄贈いただく予定です。楽しみにしていてくださいね。